

学校と言えば、私が中学生のころは、一つの小学校から中学に進学できる者はせいぜい二人か三人しかいなかったものです。私の住んでいた山梨県には、当時、中学がたった五つしかなくて、その定員は五つ合わせても600人でした。

ところが、今では、山梨県内に大学だけでも五つ以上はありましよう。従って、大学生の数が、昔の中学生の数よりもずっと多いのです。ことによると、今の大学生の数は、昔の中学生の十倍もあるのではないのでしょうか。ともあれ今の学校教育の隆盛には驚くほどのものがあります。

学校教育は真に隆盛か？

しかし、この学校教育の隆盛も、そのまま素直に喜べないものがあります。「山高きが故に尊からず」で、学校の数が多いだけで、教育が盛んだとは言いきれないからです。

学問が嫌いなくせに大学に進みたがり、大学に入りながら聴講しよ

うともしない学生が何と多いことでしょう。彼らは、ただ卒業証書を手にするだけを目的にしているのです。

このことは、大学生自身に、学問に対する情熱のないせいもありますが、今の社会の人間評価の仕方にも責任があります。ただ大学を出たか出ないかで、安易に人間の価値を決めようとしたり、また、その大学にもいろいろの格差をつけて、人物を見ることよりも、出身大学によって人間を評価する傾向があるからです。

ただ大学を出たからりっぱな人間になれるのではなく、そこで学問をし、修養をするからりっぱな人間になれるわけで、ただ授業料を納め卒業証書を手にしさえすれば、りっぱな人間になれるというわけのものではありません。

そんなことは、わかり切ったことですが、大学を出たというだけで社会がこれを優遇するものだから、未熟な青年が、それに応じて、卒業証書というレッテルだけを求めるようになるのです。

外装よりも内容を

教育というものは、大学というレッテルがなくても、また広大な建物や整った設備がなくても行なえるものです。吉田松陰が開いた松下村塾はその良い証拠です。外装よりも内容が問題です。

ところが、今は内容よりも外装を問題にする人が多くなりました。よく、上げ底の土産品が問題にされますが、これなども、今の多くの人たちが、見かけだけを必要以上に重んずることから生じた弊害であることを知らなければなりません。

「だます者は勿論悪いが、だまされる者も悪い」のです。外見だけにとらわれる人がいなかったら、こんな上げ底を作る商人はいないはずで、だから、上げ底を作る商人を責めても問題は解決されないのです。買い手が実質を重んじて外装にとらわれなければ、上げ底は必ずなくなります。

それと同じように、大学をレッテルと考える若者たちだけを責めるのはまちがっています。若者たちを雇傭する社会が、レッテルよりも、人

物本位の見方をするようになれば、自然とこのような風潮もなくなるはずで、また、そうならなければ、この世に真の進歩発展は望めません。

私は今、幼児教育の重要性を説き、できれば、「一年早めて五歳から」と言わず、「三歳からの集団教育」を希望し、計画していますが、今の世の多くの人々の、安易な“学校教育万能”的考え方では、その実現にためらいを感じます。正しい学校教育は、一年でも早く始めるに越したことはありませんが、誤った学校教育なら、早く始めれば始めるだけその害も大きくなるからです。

昔から、「同家百年の計は教育にあり」と言われていますが、それはお題目だけで、その意味内容があまり深く考えられていない憾みがあります。しかし、国家社会の真の発展、国民生活の真の平和、というものの基礎は、実に教育の成果いかんにかかっているのです。

このことは、先般、インド及び東南アジア諸国を歩いてみて痛切に感じました。日本にいては感じませんが、外国に出かけて、教育の遅れている国に住む人々に接しますと、この文化の遅れをとりもどすこ

とは、容易ではないことを痛感させられます。それは、全く教育のないことによります。

後進国にみる“教育”の意味

学校教育の貧弱なこともさることながら、家庭教育のないことです。生活の窮迫が、教育を考える余裕をなくしているといえればそれまでですが、私には、それだけではないものがあるように思われました。

たとえば、日本なら、どんなに困っても、わが子だけは「できるものなら教育を受けさせたい」と願わない親はないでしょう。またどんなに悪いことをしている親でも、わが子だけは正しくりっぱな人間になってほしいと願うでしょう。ところが、それがこれらの国々ではほとんどどうかげないのです。

だから、私は、これは大変なことだ、これは経済だけで片づく問題ではない、と痛感したのです。その意味では、学校教育が過大評価されすぎているわが国の世相を、どんなにか有難く思ったことです。

教育の本体は親の責任に

しかし、それはともあれ、教育というものを、真底から考え直してみる必要はあると思います。私は、教育の本体は、親が責任を以て行なうべきものだ、と思います。

今では何もかも学校に任せて、親はその資金を出すだけくらいに考えていますが、学校教育の効果は、家庭教育の効果に従って増減するものだ、と私は思っています。とりわけ、物の見方、考え方などは、親の日常生活がこれを育てているのです。

だから、家庭で養われた物の見方、考え方で学校生活が営まれますので、同じ教育を受けても、それぞれが違った受け取り方をし、違った人間に育つのです。ただ学校に任せておけばよい、というものでは決してありません。